

武藤です。10月10日に開催された「泊原発地質調査現地見学会」主管：行動する市民科学者の会・北海道に参加してきました。

寒風がつよく、雨もぱらつくあいにくの天気でしたが、小野有吾先生のバス内では添乗員顔負けの自由闊達な解説と、下車してからは5か所の地盤や地層を見学しましたが、普段は見すごしそうな地味な地盤でも先生の解説で生き生きとパノラマのように際立ち、学生のころは興味のなかった地学がこんなに面白いものかと感じ入りました。

一行は8日からの集中行動に参加された本州の方が多かったですが、デモや集会だけでなく、こういう企画がいいんだよなあと喜んでいました。

貴重な話がてんこ盛りでしたが、1, 2挙げると、堀株という泊周辺地域は、どこも脆い岩石や、砂岩から成り立ち、この上に原発が立地するのかと暗然たる気分になりました。

たぶん、海に近く人里離れ、しかも札幌や小樽に近いということで、十分地質調査せずに決定したのでしょう。素人が見ても危うい地盤というのは一目でわかるのですが。

もう一つ、活断層ばかり注目されますが、積丹も長い長い歴史により、隆起、テラス（堆積）、火山層、地震による断層、津波による積層など、断層を見ればいかに複雑な要因が重なり合って現在に至っているということが先生の解説でよく分かり、しかも数百年から数千万年前の地層が同居し、まさに情報の宝庫。これをみれば、原発立地に火山や津波の危険はないという北電の開き直りのような発言は、議論してもどうせ敵わないという心境からかと思いたくなります。それと、東日本震災とは異なり震源地が陸地に近いところに位置しているため、地震が発生したら間髪を置かず津波が襲来するという話も脅威でした。

今回は補助椅子もほとんど埋まるほどの盛況でした。これで会費1000円は勿体なさすぎますが、早くから地震による原子力災害への警鐘を鳴らしていた故高木仁三郎先生の基金から助成を戴いているそうです。62歳で亡くなった先生の遺志が継続して現在まで活かされていることも感慨深いです。

我々は死して廃炉を残そうか、と考えつつ泊を後にしました。